

平成30年度第1回 総合事業等審査会 議事要旨

日時：平成30年9月13日（木）

9：30～12：00

場所：3号館7階中会議室

1 開 会

2 議 事

[新規事業]

○国際観光芸術専門職大学（仮称）整備事業

[進捗状況報告]

○県立はりま姫路総合医療センター整備事業

○神戸商科キャンパス学部学科再編事業

○姫路工学キャンパス新2号棟整備事業

【国際観光芸術専門職大学（仮称）整備事業】

○委員

説明を聞いていると、但馬地域の人たちは自分たちの子供を入れる大学を作って欲しいというふうに聞こえる。他所に行かないで欲しい、帰ってきて欲しい。そういう意味で人材育成の必要性と地元の声にギャップがあるのではないか。

○事業部局

まさに地域の方は、人口流出を止めたいという思いもあるが、一方で、外からもどんどん若者に入ってきて欲しいという思いもある。実際に福知山公立大学であったり公立鳥取環境大学では、地元から通っている人の率は極めて低い現状がある。

最終的には地域に就職をして欲しいというのが、究極の思いである。他所から来ていただいて、そこで起業するなり、新たな事業展開するなり地域の活性化に寄与していただいて、地域に残っていただく、あるいは他の地域に行っても、この地域と連携等していただくなど、そういったことも踏まえた地域活性化を図っていきたいと考えている。

○委員

目指しておられる人材が地域に何十人もいるような人材ではない。数名いけばその地域にとってありがたい人材を作ろうとされている意志の高さと地域の人たちの気持ちにギャップを感じる。

○会長

福知山公立大学は、もともと私立の成美大学が公立に転換し、学費が下がり外から人が入ってきて地元の方がいけなくなったという批判が出てきた。公立大学として学費を下げることで、全国からより多くの方を寄せたいという思いもあるのだろうと思う。一方で、おそらく大学があることによる活力というのもおそらく地元の期待としてはあるのかなど。地元の子供が流出しているから、という側面が見え隠れする。これは例の加計学園もそうだが、他に若い子たちが定着する装置があるかというとなかなかない中で、やはり大学に期待をするところがあって、地元のずれていうのはあるかもしれない、ということが委員のご指摘だと思う。

○委員

兵庫県では県立大学がCOCのあとのCOC+、頑張っで公立大としてお取りになり、そういう意味では、これはもうまさにCOC+の施策にストライクのような提案と思う。COC+の後任の事業にこの事業をもってくるのか。

○事業部局

現時点ではそこまでは考えているわけではないが、とにかく設置認可に向けて、あるいは開学に向けて準備をしているという状況。

○委員

COC+のニューバージョンが、おそらく今の政権が続けば、できるだろうから、その辺も含めて完成させておしまいではなくて、もう一歩先までせめて開学から5年後ぐらいまでは、そういう公的な競争資金が入るような方向性も見定めてぜひシェイプアップしてもらいたい。

○事業部局

研究させてもらう。

○委員

関連させてこの事業の評価には、具体的にCOC+で言っているような若者人口をどれだけ高められるかとか、そういったところを入れていいと思う。あるいは外から来た人が定着するといったところをもっと事業評価の数値基準にされてはどうか。

○会長

多分認可申請時には地元就職率20何%とか30何%と書かなくてはいけないと思うが、そういったところをしっかりとアピールするようにということだと思う。

○委員

公平性という観点において、但馬の方からいろいろ要望があったということだが、大学で言ったら丹波にもないので、但馬と言うならば何か合理的な理由があるのではないか。

卒業した後の出口の部分になかなか見えにくい。80人をどう引っ張っていかけるかっていうのが大事かなど。そのうちの何割を地域に残すかという目標を定めるような出口戦略のところを具体化すべき。いわゆるアートを企画できる人を目指すのであれば、それを引っ張る人や先生が必要というのは分かるが、その一人に頼るといふわけにはいかない。

観光と文化、芸術というのは教育上一緒にできるのか少し疑問を感じる。観光はある程度マネジメントということで想定できる。あるいは国際的なものもあると思うが、それらがどこに共有性を持っていけるかというところを詰めていただきたい。

ストック効果がこれから期待されるので、大学の中に劇場を造っても、それが外向きに使えるような稼働率も資料の中に書いておくべき。

大学までの交通インフラっていうのはとても大事。これは大学を作るにあたって幹線道路ネットワークであったり、但馬空港と神戸空港の活性化も両立に合わせないとやっぱり学生が集まりきれないのではないかと思う。

何らかのインセンティブ、奨学金的なことも考えていくべきじゃないか。

○会長

要点は、一つはまず文化の方の出口をどうするのか。教授陣、平田先生を学長にということだが、例えば教授陣を呼べる保証があるのかといったところ、それから芸術劇場の稼働率、学生を集めるため奨学金等のインセンティブがあるか。

○事業部局

出口戦略について、どのぐらいのニーズ、ロットがあるかというのは、文化については確かに限られている。出口としては、例えばパフォーミングアーティスト（舞台演者など）、舞台演出家、大道具も含めて舞台を支える人たち、公演企画者、各施設のアートマネジメントあるいは指定管理で受けて実際に運営する人たちを想定している。ただ、教育の手法としては、演劇というのはあくまで基礎的な能力をつけるために全員にさせるということで、そのまま演劇人を育てようという大学を目指しているわけでもなく、そうして身につけたコミュニケーション能力を通じて、通常の民間の会社であったり、いろいろな例えば旅行会社であったりということも含めて、文化で入ってきた人も就職してもらおうということを想定をしている。

そのために教科としてなじむのかということについては、文化であっても観光であっても、同じ教育を最初は受けていただくということを考えている。人を呼び込むという意味では、共通した部分、ツーリズム資源等をいかにうまく見せるかなど、その辺の部分は共通した部分があると思っている。最初は同じ教育を受けてもらってさらには事業創造、マネジメント、マーケティングの部分もこれは共通するものではないかということで、文化も観光も一緒に学修してもらおう。

平田先生が今まで仕事を一緒にされてきたような実務家教員が多数いらっしゃるって、豊岡に劇団ごと移転されるというようなこともあるので、実務家教員については一定程度想定をしている。

劇場の稼働率については、舞台芸術専用の劇場であり、音楽ホールのような大きなものではなく200名程度の劇場である。劇場は専ら学生が演習をすることを中心に考えている。場合によっては全学生が勉強する。実際に市民向けに公演する際は、豊岡市内の劇場を活用することが中心になると思う。

奨学金、インセンティブについては、例えば地元就職すれば奨学金を支給、あるいはそれに相当する補助という制度というのは十分想定される場所。ただまだ検討が始まっているわけではなく、地元市町等々とはこれから協議を進めて行くところと考えている。

○会長

丹波の話で、これから要望があったら専門職大学を作っていくのか。

事業費に67億円かかるが、豊岡市は土地を提供して、あとの支援はないのか。

○事業部局

18歳での人口減少率が一番厳しいのは但馬である。これは他所の地域に比べて圧倒的に厳しい状況になっている。ただ丹波も同様の傾向を示している一方で、十分阪神間に通える方もおり、実際に大阪に通勤されている方も多数いらっしゃる。地理的なことを考えれば、但馬の方がさらに優先度が高いと考えている。

頼まれれば専門職大学を作るのかという点についてはいろんな条件がある。もちろん地元の強い要望も前提になっており、18歳の人口減少率、更には地域資源の面から見ても、但馬地域が非常に恵まれてかつインバウンドでも城崎が頭角を示している。そのような状況も踏まえた中で、こういう構想が進んでいるとご理解いただきたい。

豊岡からの支援については、無償で用地を貸し付けるという以外にも豊岡市自身

は運営主体に8億円を寄付すると表明をされている。今後運営の中で市民に還元できるよう公開講座であったり、あるいは小中高大連携であったり、リサーチ&イノベーションセンターでの取り組みが出てくるだろうということで表明されているもの。そのほか、寄付講座を含めて今後協力をさせてもらいたいというような表明をされている。

○委員

中身はとても魅力的な大学だなと感じたが、事業名、国際観光芸術専門職大学というのが、魅力がないのでここはちょっとお考えいただいた方がいい。

○事業部局

今現在は仮称ということで、最終的にはまた今後検討させていただきたい。

○委員

学生寮について、但馬を志向する学生がワンルームマンションに入りたいかという疑問に思う。選ぶとする学生の志向性と考えられていることが合っていないというふうを感じる。豊岡市の空き家活用などと一緒にして、豊岡市には空き家の活用に修繕費を出してもらいながら、学生が街の中に住まってたくさんの地域の人たちと話ができる環境ができるといったことの方が望ましい。学生寮を例えば実習用のホテルにするとか、もう少し地域からも求められるような、よりオープンにすべき。

○会長

1年生のいわゆる反転授業があるので、2年生以降は先ほど委員がおっしゃったような空き家の活用は多分考えていらっしゃると思う。例えば先ほど実習用のホテルを併設するとかっていうのは一つのアイデアだと思うが、何かこういったアイデアに対して修正というのは可能なのか。

○事業部局

まず学生寮について、ただのワンルームを作ろうとしてるわけではなく、シェアハウスの方式で、個人個人の寝泊まりができ、共同生活ができるようなもの考えている。そこでいろいろ交流を図りながら学修活動して欲しいということで、交流スペースもつくりようと考えているのでご理解いただきたい。空き家のお話というのは非常に素晴らしい話だと私も思っており、これについては2年次以降の学生が、空き家をリノベーションして共同で作り上げていくというようなスキームができないかというようなことを地元とも相談はしている。ただ空き家がどれだけあるかという問題もあり、全学生がというのはなかなか困難と思うが、検討したいと思っている。

○委員

観光と文化というのは相容れない気がする。文化というのは保存したり、継承していったりするもので、これまでの観光は破壊的観光、地域の資源を消費する観光。その中で、持続可能な観光というのをちゃんと打ち出せるかが重要。これはカリキュラムの議論だと思うが、ここをきっちりやっておかないといけない。県内全域に城崎温泉を作るわけにはきっといかない。それぞれの地域が持っているいい所を活かす、負荷をかけない観光、そういったものをどうつくっていくかっていうことが、非常に重要ではないか。これはおそらく人をどう確保するかっていうところと繋がってくるはずで、神戸にもそれが考えられる人材は少ない。カリキュ

ラムの中で育成していくことが重要。

実習があるから、学生一人あたりで高水準の交付税を獲得することができると思うのであれば、それなりの役割を果たさないと無理だろう。例えば、つぶれそうな全国の施設にそこにしっかりインターンシップで入って行ってそれを立て直したりするっていうようなことで、生活の治療、文化の治療ができる、そういう位置付けを明確に、そのあたりを大切にすることが重要と思う。

豊岡市は8億円の支援をするということだが、県立の専門職大学としての独立性というか、経営のマネジメントについては、独立したものとして持続できるかが課題ではないかと思う。

学生には地元をしっかりと体験させてあげてほしい。淡路の吉備国際大学で何人かの学生に淡路の中の事を聞くとほとんど知らないという。南あわじで勉強しても淡路の中の事をあまり知らない。つまり実習場と行ったり来たりしてるだけということになるので、先ほどもコミュニティーの中で暮らすというのは非常に重要だということをおっしゃっていたが、そういうところをきっちりやることが重要と思う。

最終的に卒業生が出て、豊岡但馬地域あるいは兵庫県がほかの地域と違ってこういう素晴らしい文化や観光の地域になるというような、イメージが伝わってこないのが残念。いわゆるビジョンはあると思うが、資料にビジョンが書かれていない。

○委員

昨今大規模災害が頻発しており、但馬地方とか、丹波とかも、非常にひとたび災害がということになる、大変なことになるのだろうなという危惧をいずれの市もされていると思う。そういった中で、県の予算の優先性を考えたときに、今学校を作る、この少子化の中で学校をつくるのが果たして優先なのかと言われたら、私が但馬の人だったらそれは要らないと言うかもしれない。しかしながら教育っていうのは、すぐ見返りを期待するものでもないし、10年後20年後に何かそこで受けた教育が活かされるみたいな視点でないとなかなかできないことなのかなと。この限られた財源でもあるので、いろいろ踏まえた上でこの67億っていうのがすごく生きたお金になることをもうちょっと県の人に理解されるように具体的なビジョンを盛り込まれるべきだろうと思う。但馬の振興のみならず、県全体が豊かになるようなところで、何か具体性がもうちょっとあるとより賛同しやすいのかなというふうに思う。

○委員

今子供の遊び場自然の中で遊ぶという活動をしているが、もともと子供と親と一緒に劇を見ようという子供劇場運動をしており、要するに舞台が好きだっという1市民の立場で言うと、実は長野県の飯田市に人形劇フェスティバルっていうのを毎年やっていて、人形劇団が何十個も集まって、夏の1週間とか2週間ぐらいやるっていうことをしているが、それがすごくまちおこしになっている。そんなに大きな町でもないが、ボランティアで2000人ぐらい携わっているっていう、人形劇団も最近は少なくなっているものの続いているということで、どこか兵庫県の田舎の方ですればいいのになあという思いはあった。豊岡でそれをしているっていうのを知らなかったが、稼働率が85%云々とか言われたが、皆さんが実習で外に出ている間、町の人達が関わってそういう芸術祭をすることによっていいかなと思う。地域の人としては大学があることは誇りに思う。それから、小さいときから、そういうボランティアに関わってああ我が町豊岡大好きだよと子供たちが誇りに思って育つというのもいいことかなというふうに私としては思った。豊岡の方で、但馬の方で頑張って若者たちが何かしているっていうのは、とても明

るいことではないかな、町の雰囲気を変えるのではないかな、と思う。

○委員

欧米では演劇を学ぶ高等教育機関というのはすでにできている。そういう意味ではようやくそういう時代に日本も来きたのかなっていう思いはある。ただそういう舞台芸術の専門家をつくるだけではなくて、先ほどの説明にもあったが、そこで、コミュニケーション能力を培うことで、観光ビジネスに生かしていくと。なぜ、舞台芸術なのか、例えば、活字文化であったり、音楽であったり芸術分野っていうのはほかにもあるし、その中でなぜ舞台芸術なのかっていう合理的な説明がなかなか届いてこない。

例えば、城崎に国際アートセンターという既存の施設がある。そういうところを核にして、豊岡がまちづくりなり、観光資源として活かしたいというような、地域性の問題にかえっていくというところがある。芸術、舞台芸術、それから、観光ビジネスというところを明確に客観的な教育の中で位置づける理念なり、教育方法その辺をもうちょっと明確にしないと、なかなか広く理解を得られないのではないかと感じた。

○委員

取り組みの方向としては非常に先進的というか、尖ったお話で、夢がある話だと思う。ただ冷静に事業として見た場合には、やはりアウトプットの人材がどこまで求められているのかということと、そこに入ってこようとする学生さんのパイがどれぐらいあるのかとか、そういう話があってやはり事業としてはある程度のリスクはあるものと思う。ただそのリスクはどんな事業であってもあるので、そのリスクをだれが負うのかという責任体制を明確にすべきと思う。まだ具体的な運営方法が固まっておらず不確定の要素もあるかもしれないが、最終的に県で負われるものと思う。そうするとやはり県事業としてこれをやることの説明がちゃんとできるかという話に尽きてくると考える。日本全体を見てやるのか、いち地域のためにやるのか、あるいはもっと広い世界の話でやるのか。県としてリスクを負うことについて、県民に説明するための理屈の構成というところで、説明が少し弱いと思った。

○委員

なぜ演劇かというところで、キーワードをコミュニケーション能力とされている。むしろ平田先生たちがやっているのは、いろんな学校で子供たちを巻き込んで、子供劇場もそうでしょうけどワークショップをされる。ワークショップというのは実は演劇から発生した教育の手法。だから汎用性が非常に高いはずで、コミュニケーションって言うと何か上手にものしゃべるみたいな感じだが、そうではなくてワークショップの中では、共に作るっていうことが非常に大切とされている。もう少しここを分かりやすくアピールすべき。ワークショップは今いろんな分野に広がっている。

○会長

議論の中で、67億円という事業費に対する若干の懸念はあったものの、長期的な視点であれば波及効果が十分見込めるのであれば、今回の事業については進めてよろしいというご意見だったと思う。

ただし、いくつか留意点がある。

第1点は、やはり地域との関わりで、但馬地域においてどのようなイメージあるいはビジョンをもって大学を位置付けるか。

2点目は出口の問題で、例えばワークショップなどを通してどういう人材を作っ

ていくのか。だから、観光と演劇というのは相乗効果をもってより良い人材の育成していくのだと育成ができるという具体的な説明が必要ではないか。

あと地域との関わり言うと、その運営のあり方で、豊岡市との関係はどうかとか、県立大学は今独法化されているが専門職大学はどうするかとか、誰がリスクを負うのか、当面は県となるわけだが今後どういうふうな展開をしていくのかという組織運営のあり方について、見通しが必要ではないか。

寮の話が出たが、留学生と交流できる寮をつくるとかっていうのは国の方の流行なのでおそらくその方向でいくと思うが、そのあとは街中でしっかり定着するような仕組みを考えていただきたい。

【県立はりま姫路総合医療センター整備事業】

○委員

将来の拡張性というところで、立体駐車場の部分に拡張できるという話だったが、駐車場の台数が減ってしまうのではないかと。将来的に駐車場が減っても大丈夫なのか、そのあたりを補足願う。

○事業部局

資料に配置図を載せているとおり、拡張用地は北側にある放射線治療棟横の平面駐車場であり、ここを将来の拡張用地に考えている。拡張するとなれば放射線治療棟の上部を駐車場に活用するであるとか、立体駐車場を増設するなど、駐車場の必要台数も勘案しながら、考えていきたい。

○委員

最近非常に災害が多いから聞く。東側に川があるが、ここは大体どれぐらいの海拔にあるのかということと、万が一災害があった場合に、この電源のバックアップであるとか、水のバックアップであるとかについて検討されているか。

○事業部局

この場所は姫路市のハザードマップで浸水50センチ以下という区域になっている。整備に当たっては、ここの整備地の地盤を周囲から1メートルほどかさ上げして整備を行う予定にしている。またインフラについては、非常用電源が連続72時間を持つ燃料を確保しており、その後、燃料補給することで1週間程度は停電時でも運転可能という計画をする予定になっている。上水についても3日分の容量の受水槽を確保しており、下水についても、下水道が分断された場合に、3日分の容量の排水槽は確保するという計画にしている。

○委員

大きな本体病院棟は免震構造となっているが、大阪の北部地震でもあったのは精密な機器を置く放射線治療室とかが、そういう免震構造になってないということで、結局北部地震でもiPS細胞を使った臨床研究が、iPS細胞培養の中断で遅れる事になった、あるいは電子顕微鏡の損傷などがあったが、そういうところは大丈夫なのか。

○事業部局

放射線治療棟につきましては、免震構造ではないが、耐震性能1類という一番高いランクのものに設計する予定にしている。1類というものは、大地震があっても

構造体への補修をすることなく施設が使用できるというレベルまでの耐震性のもの。電源施設は、別棟の教育研修棟の2階に設ける予定となっている。

○会長

例えば、事業継続プラン等は作られていると思うが、建物が耐えても機材が駄目だったら、事業継続できない。そういったところは、もう少しご配慮いただいた方がいい。

○事業部局

会長がおっしゃるように、この病院は災害拠点病院になる予定になっているが、現時点においても、いわゆるBCPの作成を義務づけられているので、今日いただいたご意見も踏まえながらこの新病院のBCPもしっかりと作っていきたいと考えている。

○委員

組織文化の融合を円滑に進めるということが、あえて項目にあがっているっていうのは、やはりこれはなかなかハードルが高いもの。おそらくまだプランニングの段階ではうまく合わなくて、実際にやっけていながら、合わせていくものになるものと思うが、その辺りはどの辺が目標になっているのか。どんな状態が融合した状態というふうに考えて、今後進めていくのか、そのあたりを聞かせたい。

○事業部局

一般論になるが、例えば我々県立病院で尼崎病院と塚口病院を統合再編した。その際に同じ県立病院でありながら、また同じ関連大学だったが、例えば看護の手順であるとか、いろんな様式、マニュアルが異なっており、同じ診療でも異なっている、というような状況があったので、まず形式的にはそういうマニュアルであるとか、手順書それから様式、そういうものを統一していくということが大事だと思う。それから、2番目に、今回は、民間病院との統合再編で昔はいわゆる企業の病院ということで、やはり企業の一員という意識と地方公務員という意識の問題もやはり若干差があると思うので、新病院は、地方公務員になることへの意識改革、さらに、新病院の理念・目標を共有する、ビジョンを共有する、そして医療活動に当たっていただくという点が必要だと考えている。

○委員

最近ではIPW、専門職協働ということが言われているので、そういう何か研修等を始めて意識改革を図っていくというようなことも、可能であればやられてはいいかなと意見として申し上げたい。

○事業部局

部門別のワーキングというところで両病院がそれぞれ意見調整をやっている中で、日頃の診療での疑問であるとか、お互いの研修であるとかそういったものを行いたいと考えているし、すでにやっているところもたくさんあると思う。また、単独の部門だけでなくいわゆるチーム医療ということも大事なので、その二つの病院がチーム、多職種でチーム医療をやっていくというようなことも徐々に、症例検討とか研修の場を活用して、新病院開設までに準備期間としてやっていきたいと考えている。

○会長

審査のときにも確かこの議論が出て、加古川の神鋼加古川市民病院の統合の時2年ぐらいで組織を作ったというお話で、それも参考にするということがあった。先ほど委員がおっしゃったところは、審査の時も同じような議論が出て、それは対応するというので、先ほどおっしゃったような部門別の研修等をされているということだろうと思う。

○委員

文化にどれだけ違いがあるっていうことがお互い意識されているのか。それでどう埋めていったらいいっていうのが今課題になっているのか。

○事業部局

どういった違いがあるかというのは、非常に大きいところから、細かいところ様式であるとかマニュアルもそう、例えば先日聞いたのは手術室での頭の位置を部屋の奥に入れるのか手前に入れるのかとかそういう本当に細かいところまであるので、すべてを検証するのはボリュームも多すぎるかと思う。今は設計段階なので、各病院のマニュアルを落とし込みながら図面を検証する中で、一つ一つ課題とか違いを洗い出して行って、お互いすり合わせを、目指すべき病院の姿を考えながら、調整を図っている。その調整を図る上で、地域医療連携推進法人という二つの病院をホールディングするような、組織体をつくって意見を調整していているところである。本当に大きいところから小さいところまでいろいろあるが、ただ大きいところで目指すところの方針は決まっているので、何か大きい課題があっても、事業が止まっているということはないのでその辺は安心いただけたらと思う。

○委員

おそらく形式知化されている部分については、それをうまく統合するっていうのは割と時間があればできると思う。むしろ形式知化されていない側面というのがきっとあると思う。例えば頭の位置をどうするかとかそういうことはお互いに共有化されているけど文書化されていないとか、そういうことがきっと問われるはずなので、医療の分野では、標準業務手順書を作るっていうことでかなり形式知化されていると思う。まず洗い出しをワーキングというか、ワークショップ形式でやるとかですね、そういうことがいるかと思う。

○事業部局

今のところは開設まで少し時間があるので、設計の図面を引くことによって、洗い出しをして、次にその工事が始まったら今度は各業務マニュアルを1年なり1年半かけて作り込んでいくので、そこでもすり合わせが大分できると思う。そのあとはそれを踏まえた研修であるとかシミュレーションに入っていくので、一つずつ丁寧に手順を追って、対応していきたい。

○会長

先ほど委員がおっしゃったのはやり方の問題で、先ほど例えば頭の位置がどうか、これ単に設計の問題ではなくたぶん理念の問題、足元から患者さんを手術室に入れるのか、頭からなのか。考え方・理念が違うという問題だと思う。そういうことが設計に反映されるのは、暗黙知というものが実は重要でそこがすり合わないともマニュアルは一緒だけでも、理念が合ってなければ要するにマニュアルは緊急時に役立つたないときがあっても。理念がどこまで浸み込んでいるか、そこを心配されていると思うので、そこは先ほど委員がおっしゃったようにやり方の問題で、ワークショップ

プをやるとかもっと徹底的に話し合う等、共有化して欲しい。今後1年半かけてやられる中でそういうこともお考えいただければと思う。

○委員

先程の話と関連するが、県民・市民の立場に立てば、当然2つの病院の診察券は共用で、各種検査結果や診療結果は共有・一元管理され、重複した検査が実施されないと言うことでよいか。

○事業部局

引き継ぎという面では、それぞれの病院にかかっていた方の診療情報は引き継ぐことになっているので、新病院ができたからといって、これまでの患者が新規患者というようなことにはならない。今までの両病院に入っている情報についてすべて新病院の方に移すので、日々の診療に支障が出るということはない。

○委員

私としては駐車場の確保が最大の問題かなと。患者になったとき状態が悪い、家族を連れて行くときはやっぱり車だろうと思うので、患者さんにとっての最善を考えてしていただければと思う。

【神戸商科キャンパス学部学科再編事業】

○委員

審査の際に、各種のポリシーが今度の施設とどう連動するのかっていうところをぜひ明記されてはいかがかということ指摘させていただいた。それにものすごく誠実にご対応いただいたというふうに思うし、文科省の審査に通ったということなので、まずよかったと思う。それを踏まえて、両キャンパスに関係するが、留学生をぜひリクルートしたいといったときに、なぜこの大学、なぜ兵庫県立大に来るのかっていった時のアピールが、もう一つ、普遍的な価値感とか、そういったものの売りが弱いと思う。今そういう意味で、今後のそういうリクルートの戦略の中で、ぜひSDGsを入れ込んでいただけたら。これはまだ他所の大学でもそこまで踏み込んだところがないので。国の戦略としてもSDGsっていうのは非常に注目されてきているし、特に途上国からの留学生がこの県立大に行けば、SDGsの17のうちのいくつかのポイントについて身につくんだとも言え、例えば、ポリシーまでいったが、次の段階はルーブリックになると思うので、ルーブリックの中にSDGsを入れ込んでやれば、極めてユニークな研究機関、教育機関になると思う。その辺をぜひお考えいただけないか。

○事業部局

SDGsに関して、今岡山大学がずっと先行して取り組んでいて、日本の拠点校になっている。岡山大学に話を聞きに行き、毎年岡山大学が中心になって開いている大きな世界の会議みたいなものにも出席させていただいて、うちでどういう形でやるのか検討している。まさに留学生にとって東南アジアからの留学生にとってはSDGsは本当に深刻な問題なので、それをできるだけ取り入れていきたいと思っている。それからルーブリックに関しても、今教育改革の中で、次はそこだと思う。それで語学なんかを中心にしてもルーブリックで評価するという形にしており、それをいかに全学部、他の科目まで持って行くかと。基本的にルーブリックを活用して評価していくというふうにしてしようとしている。

○会長

SDGsはサステナブル・ディベロップメント・ゴールズということで、今、世界的な一つの大きな流れで、国連なんかも推奨してるもの。いずれにしても、商科大キャンパスだけでなくあるいは県立大学としての一つのそういった目標を作るべきというご意見。

○委員

特に国際の学生さんの国際商経済学部も出口戦略ということでいろいろご説明もいただいて、企業側としては大学にどういう特徴があるかというのがやっぱり大事だなというのが一つと。

それからどの職種をターゲットにされるのか、例えば営業部門なのか、管理部門、財務管理とかね、それも大分違うので、特にどこにポイントを置かれるのかっていうのをしばらく時間があるのでその点をお願いしたい。

それから情報の方については、カーネギーメロンと県立大学が連携されているので、そこの関連がどうされるのか。

○事業部局

出口のイメージについては、できるだけ学生が決めるべきことかもしれないが、兵庫県で活躍できる、あるいは日本と自分の国のかかる橋になるような人を育成したいと思っている。

○委員

会計基準が国際基準になっているのでそういう人達をある程度育てるというのもグローバル企業なんか結構意味があるんじゃないかなというふうには思う。

○事業部局

今学部生を5年間で大学院につなげようと思っている。そこに関してはMBAと、うちはアカウンティングスクールという専門の職業系の専門職の大学院があるので、会計に強い企業人あるいはMBAに強い企業人という形で次のステップを考えようと思っている。ただ学部ができたばかりなので。

うちには情報系の独立系の大学院でシミュレーション学研究科と応用情報科学研究科があったが学部がなかった。やっぱり学部がない大学院というのはなかなか良い学生が集まらないので、下とつなげようということもあった。もう一つは今企業のニーズというのは大学院の専門でガンガンやっている人達ではなくて、AI・IoTに触れる人、AIにこき使われないような人ということで、学部レベルからそこをやっていくと、大学院に上がっても情報系の研究はシミュレーション応用情報をやると、それから後、実際に社会実践に関しては経済経営知識を持っているので、うちの神戸商科の方の大学院経済経営会議に持っていくというような形で今構想を練っているところ。

カーネギーメロン大学とのDDPに関してはなかなか人が集まらないが、今年1年間、暫定的に連携を延長するという事になった。そこに関してはしっかりやっていきたいと思っている。1年間600万円とか700万円かかるので、そこをどういう形でサポートしていくかというのはずっと課題としてある。

それに現行の二つの大学院、特にDDPを運営している応用情報との連携については、課題として認識している。

【姫路工学キャンパス整備事業】

○委員

外部資金の獲得に関して、COCだとかあるいはCOC+であるとか、そういう公的な資金を導入して非常に積極的にされてこられたというのは、評価できるが、DCリーディングの次の卓越大学院とかに関しては、どんな取り組みをされておられるのか。

○事業部局

卓越大学院に関して、神戸大学医学部、徳島大学医学部とうちの理学部と一緒に、まさに理医（リイ）、理学部と医学部とが一緒になってやるというような形で今申請している。

○会長

今後地域との関わりということで本館の方にこういった大きな施設ができて地域交流拠点等ができていくわけだが、企業との連携に関して施設の共同利用とかその辺りについて何かもしお考えがあればお示しいただきたい。

○事業部局

竣工して1月にオープンする新1号館については、共同利用機器も集約して共同利用機器センターというふうになっている。

今、五つに分散している機械関係なんかも集約して研究をする。

現在のインキュベーションセンターの機能もより拡充して地元の企業を含めて共同研究等も進めていくという予定にしている。

以上